

日英動詞比較の一視点

(教育研究参考資料)

近 田 一 郎

— は じ め に —

いかに文法的に正しくても日本人の書く英文がどうも英語らしくならない根本原因はいったい何か——という高級英作文指導上の実際的見地から、著書や論文を通じて私が本格的な日英語比較研究の必要性を提唱し、併せて自分なりの打開策の鍵として両語における述部構造の差に着目すべきことを強調したのは、今から 20 年ほど前である。さいわい期を一にして、いろいろな角度からこの領域に迫る研究や発言が登場し、また往年の斉藤秀三郎氏の着眼点に立脚し、それを補強したような基本動詞・前置詞・idiom 重視の著作や辞典類が殆ど絶え間なく刊行されて現在に至っている。まことに喜ばしい。

過去における私の日英語比較部門での仕事は今も持論として授業に活用しているけれども、心ある他の教授者にすぐさま利用してもらえるほど簡潔に整理できているとは言い難い。折しも昨今の新学部構想の一環として日英語比較論とか翻訳法とかの学科目が脚光を浴びつつある情勢を考えて、ここに私見のあらましを一目瞭然の形であらためて披露することにした。部分的には若干その後の思索も加わっているが、大半が古い業績の練り直しなので、参考資料として提供する。利用の便を目下の最優先課題とし、ために説明文は必要最低限に抑え、各項目の標題と具体例だけで英語教授者ならすぐに察しがつくよう配慮したつもりである。

1) 「英語は英語らしく、日本語は日本語らしく」が大前提。最大の課題は、

日本人側から見て何が英語らしさの要因かを探ること。以下は筆者なりの一視点。

- 2) 日本語と比べて英語は動詞が少い言語。ただし辞書に収まっている両語の動詞数の比較ではない。同一の内容を日本語でも書き英語でも書いた場合、そこに含まれる動詞数は、日本文より英文のほうが明らかに少い——という意味。つまり、日本語の発想だと動詞表現になるところが英語では必ずしもそうでない——という事実。この傾向を無視して、一定量以上の英文に英語らしさを求めることは殆ど不可能。

顕著な事例を一つ。「自動車のためにだけ道路をさかんに作って、歩く人間のことを忘れている東京を見て、なんと言ったらよいのか。」(大佛次郎) これら動詞表現個所を逐一英語の動詞に置き換えたら、英語とは似てもつかぬ非現実的スタイルに終わること必定。そこで、極端は承知の上で動詞をいっさい用いない思い切った対処をすれば→What about today's Tokyo with networks of auto-roads alone at the sacrifice of its pedestrians?

これほどでないにしても、「紙飛行機は大きな弧を描いて飛んだ」の下線部を *in a big circle* と無動詞表現できる日本人は僅少。

もちろん日本語でも、文語調・集約的な文章では動詞を絞る傾向がある。(歩く人間→歩行者／あまり腹が減ったので→空腹のあまり)この点、英語も *written* と *spoken* とでは差がある。しかし日英両語間的大幅な差異とは比べるべくもない。

- 3) 動詞節減に最も留意すべき場面 日本人が条件や譲歩を表わす従属節を想定するところを、英語では動詞抜きの *phrase* で済ませるケースが実に多い点。日本人は中でも *if-clause* 過多症。

(事 例)

- a) If you think just a moment, you'll understand you are mis-

taken.→A moment's reflection will show you that you are mistaken.

b) You can get anything if you go to a department store.→~at department stores.

c) She was weeping though the reason wasn't clear.→~for some unknown reason.

d) If you carry this fountain pen with you, you can write perfectly well during the flight.→With this fountain pen,~.

e) If you use this tonic regularly, you can keep your hair young and alive.→Regular use of this tonic helps keep~.

f) 「暗かったから最初は何だかわからなかった。もっと近寄ってよく見ると、それは仔猫の死骸だった。」→A closer inspection revealed~.

g) In recent years in Japan much emphasis has been placed upon spoken English, upon the "living language." This is as it should be, and many excellent books, tapes, and recordings have been produced for teaching spoken English. But the emphasis upon spoken English has not decreased the need for clear and effective written English. If anything, written English becomes more important daily. [Thurston Womack・三浦新市「現代英文の構成と語法」序文] 下線部に対する標準的な日本語は当然「話す英語をそのように重要視するからといって、立派な英文を書く必要度が減ってきたわけではない」となるべきで、二重下線部で抽象名詞の動詞化が不可欠。だから逆に、こういう動詞優位の日本語感覚で英語表現に臨むと、十中八九 Although, Even if などの接続詞を先頭に据えて二重下線部を展開することになるわけ。

h) 「動詞を使いすぎると英語らしくならない」も, If you use too many verbs, ~一辺倒にならず, Overuse of verbs~ という発想も必要。

- 4) 生の動詞・加工された動詞 ^{ママ}ひと口に動詞は要注意と言っても、問題なのは現在形・過去形・未来形・完了形のように「主部を受けて直接に述部を形成する最も単純な動詞用法（生の動詞）」、これの多用がいけない。他方、動名詞・現在分詞・過去分詞・命令法・不定法など（加工された動詞）は、普通さほど問題にならない。例えば、これも抽象名詞先頭のセンテンスだが、

Failure *in* prompt payment will be taken as an indication that you do not wish to take part in future activities of this society. [会費滞納者に対する 某協会の督促状末尾] では、文頭の主部を Failure to make prompt payment としても支障は生じない。

- 5) 輝かしき例外——Be 動詞 数ある英語動詞の中で *be* 動詞だけは別格。これを多用して英語らしさが増すことはあっても、それが薄れることはまず考えられない。もし *be* 動詞が、She is a very sweet girl. のように、単なるツナギ (copula) の役だけに終るのであれば、何も取立てて論じるまでもない。ところがこの動詞には忘れてならない別の重要使命がある。即ち *be* 動詞には、特定の語（句）と結合すると他の大抵の動詞の代用がつとまる——という極めて重要な機能がある事実。Be 動詞の直後に続いて結合の対象となる語（句）は、大ざっぱに言って次の5種類ぐらいだが、このさい注意を喚起したいのは b・d・e。

a) fond of～ / afraid of～ / proud of～ の如きもの。並びに able to～ / about to～ / anxious to～ / apt to～ の系統。この種の多くに精通すること勿論大切だが、ここでは喋々を避ける。

b) 前置詞で始まる 慣用句……at a loss / in (full) bloom / on the wing / at work / in a similar boat / under construction / in (great) danger / at one's option / at stake / of (much) interest / of (vital) importance / of (no) value / in tears / to the point / in (acute) shortage / in trouble / at one's wit's end / off the mark / on the market

/ in (little) demand / (not)for sale / in preparation / of (some) avail / under way / in progress / on display / in (popular) use, etc. 私見では、これらが be の直後で結合する述部構造が現代アメリカ英語でますます顕著になりつつあるように思える。この傾向を表現するにも英語では This type of structure seems to *be* more and more *on the increase* in contemporary American English. といった具合。

c) 途中までは前項と同じだが後続部がないと成立しない慣用表現……例えば on the point of～ / under the care of～ / in the habit of～ / of (the) opinion～ / in no mood to～ / in love with～ / in store for～ / on the verge of～ / in receipt of～ / in a position to～ の如きもの。これらも実用面では重要であるに違いないが、本稿では深入りせず。

d) 単独の前置詞 (be と結合した場合、品詞の分類が変わるとしても) ……短いセンテンス例で示すと、What's on? [=What happened?] Lights were on.; Lights were off. [日本人の頭には switch や turn といった動詞がちらつきやすい。] Summer is in. [=Summer has come.] What line of business are you in? [engaged がなくていい。] Our tulip bulbs were all in. [=We finished planting all the tulip bulbs.] The novel he has been on is a very long one. [on は reading または writing の代用] 等々。

e) 英米人には最も身近な「-ly 型でない」副詞 (品詞分類上やはり問題が残るが) ……短いセンテンスで例示する。It's all over.; It's all up. / She's out. [前後関係で意味変動] He was away in Kyushu.; He's back in Tokyo now. / Is anything up? [=What's the matter?] Time's up. / Are you through yet? / He was down and out. / Ever been up? [(エッフェル塔に)登ったことがあるか・(飛行機に)乗ったことがあるか——などの意味]

* * * *

Be 動詞と直結しうる上掲慣用表現を網羅するとしたら、かなり部厚い

辞書が出来上るに相違ない。それほど be の活動範囲は広く、特に idiom とは目されない語法面でも、例えば He always mentions her name. の代りに Her name is always on his lips. とすることが可能。I haven't any money. も I'm without any money. と表現して通用する。極端に言えば、英語の動詞は純粹理論上 be だけで事足りるのだ。英語という言葉は、かくて、個々の動作・行為よりも物事の存在や状態のほうにずっと関心が強い言語であると考えてよからう。

このように英語の言語構造の根幹とさえ見なされる be-idioms も、日本の教育現場では殆ど顧みられず、学生の英作文に毎年顔を出すのは be at a loss / be in love with ~ など十指に達しないほどの貧困ぶり。述部は個々の動詞の単発に終始し、英語らしさから完全に見放されている。

因みに或る信頼すべき統計調査によれば、英語で頻出度が最も高い 10 単語は the, and, a, be (変化形を含む), in, that (各種品詞にわたる), it, of, to (前置詞・不定詞の別なし), on である由。私見支持の応援を得た思いがする。

また英語新聞の題名 (headline) で be 動詞が九分九厘欠落する現象も、be の普遍性を裏書きするものだ。

- 6) 動詞万能の日本語 英語の発想が事物の存在や状態を基盤としているのに対して、日本語はいわば動詞万能の言語で、一つ一つの動作や行為の表現こそその基本骨格である。単発的動詞充満の傾向は言うに及ばず、主語を表面に出さない述部だけのセンテンスが成立する。(I want you to meet me at school tomorrow. とか Have you finished your lunch yet? などの人称代名詞は、日本語らしい日本語なら全部脱落し、述部だけ残るのがむしろ普通。) 中でも特筆すべきは日本語動詞の複合性・累加性であろう。四段式構造さえ珍しくない。曰く「落ちてくる」「やり抜いてきた」「湧き出て来ている」「滲み込んでしまっていた」等々。中には「してみる」「置いておく」なども。つくづく日英両語の発想差を思い知ら

される断面だ。

こういう動詞充満の言語構造がすっかり身についたところで英語を習い始めるわけだから、中一あたりの教室で A book is *riding* on the desk. とか Big stones *fell and came*. [本来 *fell down (upon us)* となるべきところ、「落ちて来た」の発想が振切れなくて] とかが出現するのも無理はない。それどころか、かなり進んだ人でも「あかりがついて(消えて)いた」[cf. 5-d] を咄嗟に的確な英語で言うのは必ずしも容易でない。もっと進んだ段階でも、「コーデリア、立上って進み出る」を *Cordelia stands forth*. と動詞節約表現できる日本人が一体何人いるだろう。また、それほどの難物ではないにしても、She closed the door *behind her*. の真意がつかめていない人は多だろう。これは She entered the room (または逆に She went out of the room), and then closed the door. を意味する動詞節約表現で小説類に頻出するが、筆者はかつて、終始一貫「^{うしろで}後手に閉めた」で処理している翻訳書に出合ったことがある。

- 7) 動詞過多英文の実例 日本人の書く英文がどれくらい多く動詞を使うものか——その実感を得てもらうため、手許に保存してある現物から三カ所を引用紹介する。どれも某大学英米文学科 3・4 年生の作。動詞乱用度の高いほうから並べてみる。

a) Whenever I happen to read a book that is written about American literature, I feel my heart begin to beat and leap up longing to visit New England.—→Books on American literature always fill me with a yearning for New England.

b) It has been fine and dry in Tokyo for a long time, so water has become little, fires are apt to break out every day, cold is spreading rapidly, and other things are happening, too.—→The long spell of dry weather has caused various troubles in Tokyo such as water shortage, frequent outbreaks of fire, the rampant

spread of colds, etc.

c) The other day I read in a magazine that a woman who had got paralysis for suffering from polio when she was quite a child, finally got happiness recently as she married a man who had also a physical handicap just as she was suffering. —→ I read in a magazine the other day about a woman who, in spite of her long years of sufferings from polio paralysis, seized happiness at last through her recent marriage to a man with a similar physical handicap.

- 8) 異論めいた二つの主張 ずっと前、アメリカ人が物した作文教本だか書簡文典だかで「もっとふんだんに動詞を使って文を躍動させよう」という意見に出会ったことがある。しかし、これは個人的希望論に過ぎず、英語の根強い一般的実態を述べたものではない。それに、同じ米人読者向けの著作で、日本人学習者のことなど念頭にない。むしろ、こういう発言が彼らの中から出てくること自体、英語が動詞頻発に傾きにくい言語である証拠と考えてよい。

次に、作文教本や書簡文典に限らず一般の教育研究部門でもよく出る主張。曰く、「文体は簡潔を旨とし、‘be in receipt of~’ でなく *have received* を、‘be in a position to~’ でなく *can* を用いよ」と。なるほど上記 *be*-idioms から受ける感じはいくぶん固く、多分に written English の響きがある。さらに、文章は簡潔なのが最上という点にも疑問の余地はない。しかしながら、あらゆる場面で、長めの言回しは排除すべしという提唱に対しては俄かに賛同できない。生きている言葉であるからには、いつも短い語法だけに頼るわけにもいかず、時には variety を求める必要が出て来ようし、文化遺産的表現に訴えるのが最高という場合さえある。それに何よりも、以上の考察どおり *be*-idioms は英語固有の言語構造そのものと深く係わっているので、簡潔さを望むあまり全面的にそれらを

駆逐しようとする試みには土台無理がある。英語の実態を無視してまで一律に「あるべき姿」を追求するのはむしろ邪道。なお *be in a position to* の如き慣用表現には、一語付加して *be in an excellent position to* といった具合に、微妙な *variation* の可能なものが案外多い事実も見逃がせない。

9) 補足事項 英作文や英訳を指導していて気が付く問題点のうち、動詞用法に関連の深いものだけ追加しておく。

a) 関係代名詞（主格）の乱用：文法上この品詞を持合わさない日本人の書く英文がしばしば、本場の英語では思いもよらない「関係代名詞の花ざかり」現象を呈する事実は、皮肉中の皮肉。文頭の主語を受けていきなり飛び出すのも不格好だが、*sentence pattern* の一文法機能を果たす部分（例えば目的語）を受けて現われ、長々と付加的叙述が続いた最後に、僅か 2・3 語の目的補語を申訳程度に添えて結んでいる例など、目も当てられない惨状が多い。原因は様々だが、根本的にはやはり、すぐに動詞に訴えたがる日本語的発想が、直結可能な主格関係代名詞の乱発を招くものと考えられる。「関係代名詞はバンヤムラエナイ時だけ使うもの」くらいの姿勢が必要。

b) 動詞の代りに with を活用：英語で実に多種多様な活躍を見せる前置詞 *with* だが、日本人はなかなか使いこなせない。ここでは一用法を指摘するにとどめる。He went on talking *with* an unlit cigarette *between* his lips. [未熟なうちは「くわえる」という動詞を求めて苦しむ。] *with* a thick book *under* one's arm [抱える・挿む等の動詞不要。] Split has loomed large in the Socialist Party *with* its defence policy *as* the most controversial issue. [日本語なら「党の防衛政策が最大の争点とな[・]って」または「最大争点たる党の防衛政策を[・]め[・]ぐ[・]っ[・]て」あたりか。]

With 以外でも、次の如き前置詞先頭の副詞句群は、動詞節減の観点か

ら活用が望ましい。on second thought(s) / in confusion / over a cup of coffee / to the eye of today / out of pity など。

c) 受動態の日英比較: 戦前・戦中の日本語は今から想うとウラル・アルタイ系言語の一特徴をまだ保持していて、災厄や被害を意味する本来の受身形（殺[・]され[・]る・盗[・]まれ[・]る——など）のほかは、サ行変格動詞と一定範囲の動詞群だけに限って受動態を用いるのが一般的だった。

それが戦後の劣悪翻訳文氾濫のあおりと無神経な言語教育の置土産で、今や日本語は受身表現の大洪水である。「街路樹がたくさん植わっている（植えてある）」という日本語らしい日本語は昨今ほとんど影をひそめ、代って「多くの街路樹が植え[・]られている」という外国語直訳調が横行している。「昔の名残が残[・]っている」よりも「……残[・]されている」のほうが最近でははるかに優勢。「多くの漫画が大勢の大人によって読[・]まれているのには全く驚か[・]される」に至っては、別に驚かされはしないが全く驚くほかない。

爪でガラスをこすられる（これは正用法）ような不快感を覚えるこれらの言回しも現代日本の実勢とあれば、あながち懐古趣味に浸ってばかりはいられない気もする。しかし少なくとも、翻訳を業とする人士や英→日方向の授業を担う人たちには、日本語らしさ保持の観点から心してほしい問題である。さもないと、次に掲げるような、英語としても異例なくらい根強い受動態表現の直訳的日本語が、やがては豊葦原瑞穂国で流行しそうな雲行きだから。

If the rivers of the State of Maine are flown over today in a light airplane, the pollution and obstruction of the rivers from pulp mills are obvious. [環境問題を論じた 'Wilderness and Plenty' より引用]

日本語は能動態主導が美しい。警報が「出[・]されている」より「出[・]ている」ほうがずっと自然だし、手紙に「書[・]かれている」より「書[・]いてある」ほうが数等快い。最近テレビの報道に「当地では……という噂がしきりに

流されています」というのがあった。文脈から判断して当然「流れている」の意味だったが、これなど美醜の問題を乗り越えて、聞き手に「誰かが意図的に流しているのか」といった誤解を与えかねない。日本語の本質に悖る表現だ。汚染され（これは正用法）たくない。

d) 「持つ」と 'have': 英→日方向でもう一つ気になるのが持つという動詞の頻発。物を具体的・物理的に手に取ったり運んだりする時、あるいはせいぜい「所有する」意味ぐらいに限って使うのが日本語本来の感覚だったのに、昨今はこれも崩れてきた。曰く「楽しい集いを持った」「次の会議は再来週持つことにしよう」「相手に深い愛情を持っている」等々。英語の 'have' の collocation をそのまま日本語に持込んで困る。日本語らしい統語法として、集会はぜひ「開くか催すか行う」ことにしてほしい、愛情はなんとしても「寄せるか抱くか感じる」ことにしてもらいたい。「実に楽しい会合が持たれた」は c・d の複合汚染で、こうなると吐き気を催さざるをえない。それとも、「吐き気が持たれないような人間」でないと、今後の日本では生きる資格を失うのだろうか。

e) 時制問題点描: 英作文指導のさい、時を表わす接続詞 when / before / while / till などに続く部分で、明らかに日本語の言回しが影響して sequence of tenses が乱れるケースが実に多い。「死ぬまで孤独だった」「別れる間際にキスし合った」「テレビを見ている間はおとなしかった」等の下線部動詞が英語で過去形たるべきことは初歩の文法事項だから饒舌を避けるが、ただ一言、この種の文型を英訳する場合、例えば Before they *had parted*, they kissed each other. というふうに、従来の school grammar の説明に逆行する過去完了表現が起こりうる可能性が多分にあることを指摘しておく。

反対に、日本語なら過去形・英語だと現在扱い——というのもあって、指導上要注意。「テーブル・マナーを知らないと、外国へ行ったとき困る」「レストランへ行った時、ボーイがなかなか来なくてイライラすることがある」——こういうのを、慣れた人は動詞を使わずに in a foreign coun-

try (または abroad) / at a restaurant といった具合にさりげなく処理するだろうが、若い学生諸君はたいてい when I (we, you) *went* とやっ
てしまう。商業英語で At what time is a letter of credit opened?
と問うと、日本人の答は大半が It is opened when a business contract
was concluded between the two parties concerned. と when 以下
が過去形になる。同じ伝で「国会で追悼演説が行われるのは現職議員が
死去した場合の慣例だ」についても、われわれの英語がいかにか A memo-
rial address is delivered whenever a member of the Diet in active
service *died*. と過去形に陥りやすいことか。これらはすべて現在形（現
在完了形を含む）で処理すべき事例である。

ただし仮定の気分が強い場合は、また別の配慮が必要。Let's hope he
doesn't turn it down just because it came from us. [Pat. Highsmith
の短篇 The Network より]「(どうやら嫌われているらしい) あたした
ちの提案だからというだけで拒否しないでくれるといいわね」の意で、文
脈上まだ相手に申出をしていない段階での発言。特にニュアンスを漂わす
気持がなければ当然 comes で済むところ。

また英日・日英の両面で日本人が苦手とする過去形に Narrative Past
がある。小説類で心理描写を重ねる時などに頻出するが、既出の過去形伝
達動詞 (reporting verb) が以下のセンテンスの先頭で消失し、伝達内容
だけが、過去形の影響を受けて多く疑問文として展開するもの。英→日方
向なら「この伝達内容の時制は日本語で当然現在」と注意すれば済むけれ
ども、日→英方向でこの描出法を実現するとなると面倒な話になる。

—あ と が き—

日常ごく普通の生活面での言葉を念頭に私の立場を紹介したつもりである
が、以上の考察には、題材の領域別に基づく表現差の分析とか、年令や知的
水準の違いが言語表現に及ぼす影響の探求とか——いわゆる社会言語学的な
面が全く欠如している。本資料の骨子は生かしつつ、それを修正・補充して

一歩前進させうるような御教示が、そういう部門の研究者から頂けることを期待している。また旗幟鮮明を期したあまり所見が断定的に走りすぎた感じがなくもない。少し割引きして読んで下さって結構。

私見をまとめ直しながら感慨に耽った。二十数年前、敬愛する先輩(故)三戸雄一先生と日英語比較研究の底辺を模索する話合いを何度も繰返した頃のことを懐しく思い起こしたのである。当時先生から受けた有益な助言にあらためて感謝する次第である。先生はつい先ごろ他界され、私も還暦の年を終ろうとしている。